



ふらべん 88歳の星空案内人 河原郁夫

富岡一成 著

旬報社 四六判 208頁 本体1,400円+税

読み物
お薦め度
5
☆☆☆☆☆

「ふらべん」は、プラネタリウム弁士＝プラネタリウム解説者を差し、無声映画（活動写真）の活動弁士から派生した業界用語である。本書は1930年生まれで現役「ふらべん」として60年と国内で最長キャリアを持つ河原郁夫氏の半生を、1年間の取材の上でまとめたノンフィクションである。河原氏が、東京天文台の研究生、高校教員を経て、プラネタリウム解説者になり現在に至るまでが豊富なエピソードを散りばめながら紹介されている。さらに、河原氏とかかわった野尻抱影、朝比奈貞一、水野良平、草加英明、村山定男といった日本の天文・科学普及に貢献をした先人たちの為人もうかがえ興味深い。

本書はまた、日本のプラネタリウム80年の歴史を概観する一級の資料である。というのも、河原氏は少年時代に日本で2番目に開館しながら戦災でわずか6年間の活動で幕を閉じた東日天文館（在：東京・有楽町）に通いつめており、また1957年に、戦後の東京で最初に開館した五島プラネタリウム創立時の専任解説者となっているからである。このとき日本のプラネタリウムは3館、解説者はあわせて10人余。その一人が河原氏である。他の方は鬼籍に入り証言は聞けず、まとまった書籍になったこともない。さらに、河原氏が移籍しリーダーを務めた、日本で最初期に学校向けのプラネタリウム投影をはじめた神奈川県立青少年センターの記載もある。同センターからは河原氏の指導で、多くの日本を代表するプラネタリウム解説者が巣立ったが、その様子も活写されている。本書は得がたい語り部に取材した日本のプラネタリウムの歴史書ともいえる。

さらに、本書には、河原氏の四季それぞれの星

空の解説が採録されている。プラネタリウムの解説は意外と採録されることがない。それどころか、音声としてもあまり残らない。残るとしたら、施設の記録用や解説者の練習用、ファンの個人的な録音としてであり、表には出てこない。その点でも貴重である。また、活字で何度も反芻できるのはありがたい。河原氏の解説が、文学から現代天文学の話題までを一つながりのものとして構成した傑作であることもよくわかる。評者も河原氏が常に新しいことを学び、取り入れ、紹介している姿勢に感銘を受けた。教育や普及に係わるなら刺激を受けること請け合いである。

以上のように、本書は資料としてオリジナリティあふれた「原著論文」といってよい。おしむらくは、当時の雰囲気伝えるため—それは読み物として成功しているのだが—行われている小説風な表現によって、書かれた詳細が真実かどうか悩ましく感じられるのである。評者の知識に照らし正しいようなのだが、あとがきあたりで明記してあったらと思った次第である。後世の人が本書を元に何かを研究するとき悩むのではないかと思う。

なお、プラネタリウムの歴史という点では、日本で最初のプラネタリウム館である大阪市立電気科学館に関する記述が薄い。これは河原氏の関わりを考えると当然であり、それを埋める資料としては「大阪市立電気科学館70年記念誌」などがあがるが、エピソードは限定的である。

業界では2023年のプラネタリウム発明100年に向けて資料収集が進んでいるとも聞く。本書が、日本のプラネタリウムの通史が登場するきっかけになるものと期待したいところである。

渡部義弥（大阪市立科学館）